
東方銃剣録

骨皮 筋男

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方銃剣録

【Nコード】

N7014N

【作者名】

骨皮 筋男

【あらすじ】

ちよつと変わった高校生の火乃崎蒼仁ひのさき そうじと藤原閃ふじわら せんが戦いの最中に幻想入り。

ちよつと変わった幻想郷での生活。二人は何を見る？

少年少女祈祷中・・・・・・・・・・殺し合いの果て幻想入り

「マンション取り壊し予定地」

今俺は『遊び』と言う名の『殺し合い』しにやってきた
まあお互い好きでやっているし、ここなら迷惑も掛からないし、殺
し合いを演じてもいいだろ？

目の前に居るのは腰に刀を履き、銀色の髪と真紅の瞳を持った友人
であり敵。
ふじわら せん
藤原閃が居る

闘いの地は、いつもの場所。

そこには既に大量の弾痕と斬撃の痕が刻まれている

僕達は抑えきれない強者との闘いに飢えている。
何故ならお互い強すぎるからだ。

目の前には親友であり宿敵

漆黒の髪と黒い瞳を持ち、腰に大型拳銃を二挺腰に挿した
火乃崎蒼仁ひのさき そうじが立っている

ここならば誰にも迷惑は掛からない
さあ、殺し合おう

「ルールは？」

「いつも通りでいいよ」

いつも通り。

それはどちらかが勝つか負けるか、生きるか死ぬか、はたまた引き
分けるかだ

それだけの簡単なルールだ。

戦績は98戦0勝0敗98分け。初めの闘いからずっと引き分けだ
お互い今度こそといつも気合いを入れる

「合図は？」

「そつちから」

石を足の上に乗せて蹴り上げる
飛んでいった石は

カーン……………

とパイプに当たり、音を立てる

ヘッケラーアンドコック

それと同時に腰の後ろからH&K MP7 A1を引き抜き、セレクタ
ーをフルオートまで回し狙いを付け、引き金を絞る

高速で吐き出された4.6mm弾は閃には当たらず刀に弾かれるか
避けられるかするだけだ

MP7 A1を撃ちながら大きく後ろに跳ぶ

閃が最低限の回避とパライ（弾く）で突撃をかましてきたからだ
弾の少なくなってきたMP7 A1を腰に戻し、デザートイーグル両腰からDEを抜き

撃つ。

この銃は.50AE弾を発射するモデルでキャパは7発と少ないが
ハンドガンでは有り得ない破壊力を発揮する銃だ

閃はこれを超える、避けたのを確認してから飛び込む。

そのまま銃と刀の格闘戦に持ち込む。

刀は長さの関係で零距离よりも近くに寄られると攻撃を出せないか
らだ

だが閃は刀を逆手に持ち、小太刀を左手で抜刀し対処する

マズルを向けるが逸らされる。刀が飛んでくるが逸らす。暫くそれ
の繰り返しだったが

「せえい!!」

「ッ!？」

右足で左足を蹴る。そしたらバランスを崩したたらを踏みながら後
ろに下がる

掛かった！！

「せえい！！」

「ッ！？」

左足を蹴られてバランスを崩しながらも後ろに下がるが、何かを踏みつけ転ぶ

いったい何を踏んだんだ？

答えはすぐに出た。何故なら目の前に宙を舞うカードリッジがあったからだ

……………抜かった。

さっきまでの格闘戦は僕を最初にS M Gを撃った所に誘い出すためだったんだ

これで初めて決着が付くかな？

と思うがいつまで経っても地面の感触がやってこない。

そればかりか落下している！！？

目に映るは紫色の何とも言えない空間だった

“ 傷を無かったことにする程度の能力 ” そう頭に浮かび

そこで意識を失った

あいつが落ちたのは丁度人がすっぽり隠れるくらいの溝だった。

止めを刺すべく上に飛び上がり、DEを構えるがそこには閃は居ない
その代わりにかなり胡散臭い紫の空間に落ちた

ちよつとすると周りが元に戻ったが何かがおかしい

だって、目の前に広がってるのは森だぜ？

とつさに両腕をクロスして顔を庇うが木に当たり、枝に引っかか
って体が回転し、頭を強打した

「……………！」

“性質を操る程度有能力”

何かを言われて言葉が頭に浮かび俺の意識は真っ黒に塗りつぶされ
た

Stage 1：目覚めたら家の中

ここはどこだ？

体が重いが軽い。どっちなんだ？

取り合えず状況確認

俺は確か閃と闘ってたはずだ。闘ってて胡散臭い空間に落ちて森に突入して気を失ったと

体が重いのは気を失ってたからだろう

んで、軽いのは……………装備とコートが外されてる事がもう一つ気になっていた事がある

今俺はふかふかした物に包まれている。ベッドか？

プラスして頭に冷たいタオルが乗せられている。誰かが怪我の治療をやってくれたのかな？

タオルを取って上半身を起こす。目の前に映ったのは

「シャンハイ……………」

空を飛んでる小さな女の子だった

「えっと、こんにちは」

「シャンハイ」

ん？この子はこれしか喋れないのか？
そうだ

気絶する前に頭に浮かんだ“性質を操る程度有能力”ってのを試してみよう

俺自身の性質を変える。俺はこの子の言葉が解らない。だから言葉が理解出来るように【俺はこの子の言葉が理解できる】と言つ性質を植え付ける

『こんにちは』

「ああ。所で君が助けてくれたのか？」

『いいえ。私のマスターがあなたを助けました』

空から急に降ってきたんですよ？思いつきり驚きました』

「マスター？君は従者か何か？」

『違いますよ。人形です人形』

へええ。人形か……………人形！？

「えっちょえ！？人形！？」

『はい人形ですよってあなた私の言葉が解るんですか！？』

ん？普通は話せないのかな？

『はい。私のマスターも私の言葉が解りません…………』

「そっか

それで俺を助けた理由は？」

『理由なんてただ放っておけないからじゃないですか？』

家には森で迷った人をよく迎えているんです』

「へえゝ君のマスターって良い人なんだな」

『はい！私の自慢のマスターです！』

■ ■ ■

「シャンハイ」

「へえゝ君のマスターって良い人なんだな」

「シャンハイ！」

……………上海と会話している？

頭の打ち所が悪かったのかしら？

扉を開けて中に入る

「お、君がこの子のマスターかな？」

ありがとう助けてくれてって、その哀れむような目は何？」

「貴方人形と話すなんて……………」

「説明するからその目は止めてくれ

色々と突き刺さるから

まあ俺の能力はつとその前に自己紹介だな

俺は火乃崎蒼仁。呼び方は火乃崎でも蒼仁でもジンでも何でも構わない」

「私はアリス・マーガトロイド。魔法の森で魔法使いと人形師をやっているわ」

「……………魔法使いか。そろそろ理解不能になってきた」

「あら？魔法使いを知らないとなると貴方、外の世界から来たのね」

「外の世界？」

「ここは幻想郷。貴方は何かの要因でこの世界に幻想入りした外来人になってるわ。

幻想入りした要因は大概予想は付くけど」

「その要因つてのは？」

「貴方とっても胡散臭い空間に呑み込まれたりしなかった？」

「あゝうん。した。お陰で気分は最悪だ」

「そう。それじゃ何で上海と話が出るのかしら」

外人人が来た理由はどうだっていい。

問題は何故人形と会話が出るかだ

だって私も人形と会話が出来ないのよ？

「おいだから止めてくれってその目はマジで突き刺さるから色々

俺の能力は“性質を操る程度”の能力”だ。

これで俺自身の性質を変えてこの子……………上海だけ？の言葉
が解るようにしたんだ」

「……………して」

「へ？」

「私にも人形の言葉が解るようにして」

「あ、ああ。ちょっと待ってろ

ん。これで話せるはずだ」

『マスター？』

え？言葉が……………解る？

「上、海？」

『はい。マスター』

「私、あなたの言葉が解るわ」

『本当……………ですか？』

「ええ、ええ！私あなたの言葉が解るわ！！」

『ま、マスター！』

急に私の胸に飛び込んで来る上海

何だかとっても嬉しい……………

『わ、私ずっとマスターにお礼が言いたかったんです！』

え？なんで？今なんて？

「何で…………？私、あなた達に酷いことをしたのに？苛ついてる時に八つ当たりもしたのに？」

『それ以前にずっと私たちを大切にしてくれているからです。』

私たちを作ってくれて、私たちをずっと大切にしてくれてありがとうございます！
うございます！！』

胸から……………熱いモノがこみ上げてくる
私のことをこんなに思ってくれているなんて
私は上海に思わず抱きついた

「ありがとう、ありがとう！私のことをそんなに思ってくれて」

『いいえ、いいんです！私たちはマスターが大好きですから！』

.....どうやら俺はのけ者らしい。

ま、ここで割り込む方がアホなんだが
もう一眠りするかな？

「どうだ？落ち着いたか？」

「ええ.....グスッ

見苦しい所を見せてしまったわね」

「んにゃ？俺は寝てたからな。事の顛末は知らないぜ？」

「……………ありがとう」

「さてと、俺はそろそろお暇するとしますか」

「だめ！貴方は頭を打ったのよ？少なくとも今日は絶対安静」

「む……………じゃあ、あゝ」「あては？」……………無いです」

「それじゃあ私の家に泊まって行きなさい」

「はい。お世話になります……………」

くそう。完全論破された
マジでお世話になるしかない。

「あ。明日は魔法と能力の練習をするわ」

「おいおい。俺は魔法なんてさっぱりだぜ？」

「そんな事無いわ。貴方結構な魔力を持ってるみたいだし」

「マジかい」

「ええ。」

あゝ。忘れてた

「俺の他にもう一人外来人が来なかったか？」

銀髪で赤色の眼をした」

「いいえ？来てないわよ？友達？

友達に会うには色々と物騒だけど」

アリスは机の上の武器に指を指しながらいった

「あゝ。闘いをやったんだその友達と」

「闘い？スペルカードバトルかしら？外の世界にもあるの？」

「いや？スペルカードバトルってのを俺は知らないんだが」

「じゃあこのカードケースは何？」

アリスがカードケースを持ちながら言う

カードケース？カードケースなんて持ってたっけ？俺

少なくとも閃と闘ってた時は着けてなかった。

となると幻想入りした時に俺についてきた（？）みたいだ。

「ちょっと貸してくれ」

はい。とカードケースを手渡すアリス

カードケースには一発の弾丸を中心に頂点が丸になっている三角形にさらに円で囲んだエンブレムが刻まれていた
中をあけると27枚の白紙のカードがあった

「これがスペルカード？何も描かれていないんだが」

「描かれていない？って言うことは今までスペルカードを使った事がないのね……………」

丁度いい機会だわ。そのカードにイメージを流し込んでみて」

イメージを流し込む？どうか？

するとカードから絵と字が浮かび上がってきた

炎符『エンシエントノヴァ』雷符『インディグネーション』

水符『タイダルウェイブ』風符『ゴットブレス』

隕符『メテオスウォーム』速符『アフターバナー』

機符『ガトリング』されど二丈の光の如し』砲符『ロケットランチャー』儚く咲く花火の如し』

銃撃『百火繚乱』銃の銃による銃の為の宴』

と三枚つつカードに絵柄が写った

「……………九種類の内四種類がAクラス魔法で一種類がSクラス魔法ってどう言うわけ？」

「ごめん俺にもさっぱり」

ま、まさかテイルズの魔法を思い浮かべたらこうなったなんて言えないよな

それにしてもこっちでも上級の魔法だったとは驚きだ

「じゃあ明日はそのスペカを使って魔法の練習ね。神社の道中に何が出るか分からないし」

「それはそうと何故魔法の練習なんかを？」

「さっき言ったとおり神社の道中に何が出るか分からないのよ。

それと上海と話せるようにしてくれたお礼」

「そっか。それと何が出るか分からないと言っただが基本どんなやつが出てくるんだ？」

「妖精に中小妖怪ね魔法や空の飛べないあなたには十分驚異よ」

「魔法は使えないけど武器ならある。

大概の生き物なら頭を撃てば一撃だ」

「言い忘れてたけど幻想郷で殺しは基本厳禁よ」

「じゃあ体術でノックアウト？」

「人間の何倍もの力を持つ妖怪相手に？」

「すみません。無理ですわ」

格闘武器がナイフだけじゃ戦えないわ
これマジで。

俺は基本銃だ。体術もやってるが普通のプロレベルだ
閃やばあちゃんにかなうとは思ってない。

これは嫌でも魔法を覚える必要があるみたいだ

「魔法と平行して弾幕も覚えてもらっわ」

「？幻想郷では殺しは厳禁って言ってただろ？

そんな事をすればうつかりじゃなくても殺してしまうぞ？」

「……………あなたが思っている弾幕とはどうやら違うみたいね

こっちでの弾幕は魔力、霊力、妖力、神力を弾にして撃ち出すの。
こんな感じで」

するとアリスは右手に小さな光球を生みだし窓を開けて
撃った

「ゆっ！？」

「おい何か聞こえたぞ今」

「ゆっくりにも当たったんじゃない？

……………何よその目は

殺してはいないわよ。多分気絶しているだけよ。加減したから」

ふむ。

力加減さえすれば殺さないみたいだ。
便利だな。弾幕って

S t a g e 1 : 目覚めたら家の中（後書き）

何かすっごいやっつけ感がある……………

すんごいメチャクチャ

こんな駄文でも感想をくれたら幸いです。

感想とかの制限はフリーですので感想をお待ちしております

S t a g e 2 : 気付いたら湖の岸……………何この扱いの差？（前書き）

実はもう200ユニークを越えました。
本当にありがとうございます

Stage 2：気付いたら湖の岸……………何この扱いの差？

何だか体が冷たい……………

あの空間？に落ちた時に死んだかな？

「……………！……………ッ！」

あれ？誰かが叫んでるのかな

まだ意識が朦朧と……………って意識があるなら生きてるじゃん
それに肩も叩かれてる

「キミ！大丈夫か！？」

「……………っ」

「良かった……………気が付いた」

目を開けると水色の髪とワンピースをした女の子……………訂正。少
女が僕を見ていた
それと背中 of 氷みたいなのは何だろ？

「……………は？」

「ここは幻想郷の霧の湖だ」

そしてあたいは氷の妖精にして人里の守護神、チルノだ」

へえ……。。

妖精に守護神か……………

なら氷の羽？も納得だね

「僕の名前は藤原閃。それで幻想郷って？それに何で僕はこんな所に」

「なあ…………それより刀を仕舞ってくれないか？」

「へ？」

何を言われてるか一瞬分からなかった
けど自分の手を見てようやく分かった

「ああ…………ごめんごめん」

二振りの刀、七夜と小太刀をずっと握っていたからだ
慌てて腰の鞘に仕舞った

「幻想郷って何ですか？」

「そんなに畏まらなくてもいいよ

幻想郷はキミ達が居た世界とは隔離された世界だ。

幻想郷には存在を忘れられた存在がやってくる。その殆どが妖怪で
たまに神なんかも幻想入りするな」

存在を忘れられたって……………
まさか

「って事は僕も存在を忘れられたの？」

「ああ……………その事は心配なくていい。」

「何で？」

「キミはスキマによって強制的に幻想入りさせられたからだ」

「スキマってあの変な空間の事？」

「そうだと返すチルノ」

「うん。どうしようかな？」

「良かったら人里に案内しようか？」

「いいよ。。折角珍しい場所に來たから観光がてらに野宿します」

「いくら何でも危険すぎるぞ」

「はは。大丈夫だよこう見えて腕に自信あるし」

「そうか……………」

「なら何かあったら呼ぶんだぞ？」

「うん。わかったよ」

そうして僕はチルノと別れた

「大丈夫みたいだな」

あたいは外来人を見送った
ん？ちよつと待てよ確かあの方角って

「あ、紅魔館だ」

しまった言っのを忘れていた……………
幸い腕には自信があるって言っていたし何とかはなるだろ

暫く歩くこと2時間くらい。
景色は一向に変わり映えせず同じ景色が目映るばかり
そして日はどんどん傾いていく
一度装備の点検でもしようかな？

ホルダーに手をかけたところで気が付く

「ん？」

小太刀の鞘に赤色のカードケースが着いていたからだ。

僕ってカードケースなんて持ってたけ？

カードケースには二つの刀を交差させて頂点が八つになるように四角形が交差している。それにもう一組大きく囲っている

ケースを開いてカードを取り出してみると真っ白だったカードから絵と文字が浮かび上がってきた

剛刀『虎撤』妖刀『村宗』

聖剣『エクスカリバー』魔剣『ラグナロク』

舞剣『舞えよ剣、秋風に揺れる柳の様に』踊刀『踊れよ刀、夏風に吹く花弁のように』

居合『一閃、それは月光の様に』雨剣『雨の様に降れよ剣』

神刀『アマノムラクモ』

カードゲームか何かかな？

こっちに來てから確認できたって事は持っていて損はないと言う事だね

それよりも装備の点検と

七夜を抜き刀身を見る……………うん。いつも通り曇りは一点もない

続いて小太刀。こちらは無銘だがかなりの斬れ味と強度を誇っている。50口径ライフル弾ですら弾いた代物だ。

食料は……………うん。ポケットから出てきた水でふやけたカロリー

メイトのチョコ味が二箱

中身は……………

「よかった」

大丈夫みたいだ。砕け散っていない食べられる
それにしても

「失敗だったかな？」

野宿ができるのはテント等があればの話だ

ブランケット一つも無しで野宿するのは自殺行為に等しい
なぜなら急激に気温が下がったら？凍死してしまうからだ

ここはチルノに甘えていて方が正解だったかな？

更に暫く歩くと舗装された……………と言ってもただ単に踏み固めら
れた地面だが見つけた。

その先に進んでいくと真つ赤な洋館が建っていた

門に近づくと緑色のチャイナドレスを着た門番さん（？）が立っ
ていた

「すみません。道に迷ってしまったので一晩泊めていただだけませ
んか？……………門番さん？」

目は開いている。胸も規則的に上下している

……………おつきいなあ

それにしてもまさか寝てる？

手を目の前で振ってみる。反応無し

「門番さん！起きてください！」

肩を叩いて呼びかけてみる。反応無し

「仕方ない」

あんまり気は進まないけど強制的に起こすしかないみたいだね
七夜を逆手に持ち半分だけ抜刀し、一気に納刀する

シユアアアアアアアアンツッ!!!

「!? 咲夜さんもうしません! 寝ませんゴメンナサイゴメンナサイ
ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

「ちょ、門番さん落ち着いて! ここに咲夜って人は居ませんから!
!」

「へ? 居ないんですか?」

「はい。居ません」

「はあゝ……………よかった……………」

「それであなたは?」

「僕は道に迷ってしまい一晩泊めてくれないかと思って訪ねさせて
もらいました」

「それは……………うゝん。

私の一存では決められないんでこの館の主に聞いてみます」

「はい。ありがとうございます」

少しの間待っていると言番さんが戻ってきた

「主がお会いになるそうです」

そのまま言番さんに案内される僕。

「あ、まだ自己紹介してませんでしたね。」

僕は藤原閃です」

「そうでしたね。私は紅美鈴^{ほんめいりん}です。こちらこそよろしく願いします」

外が暗くなってきたとは言えこの廊下は外よりも暗い。
やっぱり窓が少ないせいかな？

「美鈴さん。どうしてこの館は窓が少ないんですか？」

「呼び捨てでいいですよ。この館、紅魔館には吸血鬼の姉妹が住んでいるんですよ」

「成る程。吸血鬼は日光に弱いですからね」

「はい。……………っと着きました」

コンコン、と大きな両開きの扉をノックする美鈴

『入りなさい』

と少女の声が返ってくる

美鈴はそのまま扉を開いた

そこには灰色の混じった白い髪をしたメイドさんと大きな蝙蝠の翼を持った少女……………もとい幼女が居た

あの女の子がこの紅魔館の主かな？少々若すぎるみたいだけど

「私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレット。貴方名前は？」

「僕は藤原閃です。この度は道に迷いこの館に泊めて頂けないかと思ひ、参上しました」

果たして泊めてくれるかな？

泊めて貰えなければ野宿は確定だ

「いいわ。貴方を泊めてあげるわ

ただし、一つ条件があるわ」

「ありがとうございます。して条件とは？」

「私の妹……………フランドールと遊んで貰うわ」

「？そんな条件でよろしいのですか？」

「ええ。かまわないわ

咲夜、客人をフランの部屋まで案内しなさい」

あの人が美鈴の言っていた咲夜って人かな

あんまり怖そうに見えないけど人は見かけによらないってよく言うし

「こちらです」

僕はふと思ったことを咲夜さんに質問してみる

「お聞きしたいことがあるのですが」

「私に対して敬語は使わなくていいですよ」

「スカーレットってスカーレットデビルの事？」

「はい。そうです」

成る程。じゃああの蝙蝠の翼も納得だ

廊下よりも暗い地下へ通じる階段を下っていくとかなり頑丈そうな鉄扉が目の前に現れた

「この部屋に妹様が居るわ」

「そう、じゃありがとう」

みた目通り重い鉄扉を開くと

「……………っ」

乾いて古くなつた血の臭いが漂ってきた

蝋燭の灯りで照らされているのは金色の髪に宝石のような翼を持った少女がいた

「君がフランドールかな？」

「そうだよ。あなたは誰？」

「僕は藤原閃。君のお姉ちゃんから条件付きで泊めてくれることになったんだ」

「ふゝん……………」

「じゃあ何をして遊ぼうか？かくれんぼ？鬼ごっこ？」

「うん！じゃあ殺し合い！！」

……………はい？

「ごめんもう一度言ってくれるかな」

「えゝ。だから、殺し合いだって！！！！」

S t a g e 2 : 気付いたら湖の岸……………何この扱いの差？（後書き）

え？チルノがおかしい？いつもの事じゃないか

銃剣録おまけtext：主人公達の設定

火乃崎蒼仁（16）

（ひのざき そうじ）

性別：男

身長：176cm

体重：88kg

髪型髪色：PSUのイーサン・ウェーバーをそのまま長くした感じで黒

瞳の色：漆黒

能力：性質を操る程度
の能力
なかなかのイケメン

9才の頃PMCで勤務していた両親をアフガニスタンで亡くし東京から沖縄の祖母の所へ

中学二年生の頃に東京へ帰郷

基本は明るくも冷静

銃の扱いに長けているし格闘戦もプロレベル
実はどこかの生まれで誰かの兄だとか

武具：

デザートイーグル

（通称：DE）

・50AEを弾丸とするモデル。

この銃はハンドガンではあり得ない破壊力を持った銃
故に反動も強い筈なのだが蒼仁は片手で、しかも二丁持って戦う

実は祖母の所で銃を学んでいる時に最初に手にした銃で父の形見

送弾数：7 + 1 × 2

M P 7 A 1

H K 社の P D W でこれの元となった銃 M P 7 よりボルトストロークを延長し、連射速度を抑えた A 1 モデルを使用

この銃は 4 . 6 m m 弾を使用する

4 . 6 m m 弾は普通の拳銃弾のような形はしておらずライフル弾のような形をしているためボディアーマーは貫通し人体の中では停止し高いマンストップングパワーを誇っている

送弾数：4 0 発マガジンを使用

P 4 6

こちらにも 4 . 6 m m 弾うを使用するハンドガン

M P 7 と弾丸の交換性を持つために開発されたハンドガン

ピカニティーレールを配置しているためフラッシュライトやレーザーポインターを装着可能

送弾数：2 0 + 1

アーミーナイフ

何の変哲もないただのナイフ

コート

母が愛用していたコート

その実体は最新の特殊柔軟素材を使用し 5 0 口径ライフルの狙撃を肋骨が粉碎骨折する程度まで衝撃を和らげてくれる

なお耐刃性にも優れている
タクティカルコートの役割も兼ねているため武器やマガジンを搭載
可能

能力解説：

単純に言うところチート。

破壊力の性質を変えれば弱くしたり、強くしたり出来る
物体Aの性質を物体Bの性質に書き換えると物体Aは物体Bになる
応用すればスキマのようなものも使用可能だが制御に失敗すると空間そのものを破壊してしまう恐れあり

性質を操っても、物質の性質が万国共通にはならない。変えた物だけ変わると言うなんとも素敵

この能力は使用解除すると使用した分の1・5倍が魔力最大キャパシティになるため魔力の増強も可

イメージCV：石田彰

藤原閃（17）

（ふじわら せん）

性別：男

身長：169cm

体重：70kg

髪型髪色：ストレート、銀色

瞳の色：赤

能力：？傷を無かった事にする程度の能力

？隙と死線を見つける程度の能力

童顔、女顔

母親は早くに死に父親から虐待を受けて育った

そのため右目を失明している

父親は右目を失明させた数日後、閃が包丁で刺し死亡

後に近所の道場へ引き取られる事になった

天然。そして天然エロス

武器：

七夜

（しちや）

長さ80cmの日本刀

退魔剣だとも云われているが詳細は不明

鐔の七つの円は七つの夜を表している

能力解説：

？はそのまま

？は相手にとつての隙が白い線となって見え、自分が被弾するルートは赤い線となって見える。要は見切り用

イメージCV：下野紘

銃剣録おまけtxt：主人公達の設定（後書き）

誰かみてみんなに絵とかくれたら嬉しいな（露骨に要求）

S t a g e 3 : 狂気・吸血鬼・姉妹（前書き）

まず始めに、

スカーレット姉妹がお好きな方々ごめんなさい

Stage 3：狂気・吸血鬼・姉妹

「えゝ。だから、殺し合いだつて!!」

「ッ!？」

目の前の少女、フランドール・スカーレットはあり得ない速度で僕に突っ込んできた。

刀を抜く暇も、右目を閉じる暇もない程の速度だ

振り被られた右手をバックステップで回避。更に左手を突き出してくる。これは

「はっ!」

左足だけで右に跳び、右足で左手を蹴つてずらす

右肩から倒れ込んでそのまま側転

これで丁度フランドールと最初の位置が真逆になった

退路は……。やっぱり無いか

あの頑丈そうな鉄扉が閉じられている

素速く回り込んで、扉を開ける事を考えた

……無理だ。あの子の身体能力をこの目で見たらうに

「闘うしか、ない」

そう決意すると、七夜と小太刀を抜き放ち右目を閉じる
見える

右目を開いたままでは解らなかった世界が見える
元々僕の視界は人の半分しかない。けど、閉じることによって人の
倍以上の視界が広がる
目に見えるのは普通の世界と、右目が見る世界

「やっと戦う気になったんだ

カントンニコワレナイデネ……………」

さつきとは違う気配が僕を叩きつける
凄い殺気いや、狂気だ

「アハハッ！！」

再度突撃をかましてくるフランドール。
右手で攻撃してくるのが『見える』
赤い線から体を左に逸らす
赤い線をフランドール右手がなぞる

「アハハ。ヨケラレチャッタ、モット、モットアソボ」

！？先程までは一本、二本しか線が見えなかったのに今度は至る所
から攻撃、しかも射撃されている様な赤い線が見える

赤い線をかき潜りながら、フランドールに接近する

途中、光の球が線をなぞってきた

……… 射撃されているような線の正体はこれだったか

右へ左へ、跳んで伏せる、更には転がる

あった。白い線だ。これが僕の勝利に繋がる

これは小太刀での軌道を映している

場所は首筋、小太刀を回し、峰をフランドールの首筋に直撃させるが

バキィッ！！

なっ、小太刀が砕けた！？

すかさず距離を空け、小太刀を確認する

切っ先から20cmは砕けた。つまりこの小太刀はもう使えない

「ケン、コワレチャッタネ」

50口径ライフル弾を弾いた得物が砕ける程の衝撃だったのに、ケロリとしている

「はは。そうだね」

「ケド、マダアナタハコワレテナイヨ？」

フランドールは何処からか一枚のカードを取り出す

あれは……… 僕のカードと同じモノ？

「ワタシモ、ケンデイクネ

禁忌『レーヴァテイン』」

歪んだ時計の針みたいな黒い棒が、フランドールの手の中に現れる

アレがレーヴァティンか、飛びっきりの魔剣がどんなモノかと思っ
たらあんなモノか

フランドールは飛び込んでレーヴァティンを振るう、が僕には当た
らない

代わりに床に直撃した

何かが爆発したような轟音が地下室に響きわたる

うん。舐めてた。すっごい威力があるねアレ

一瞬僕もカード使おうかと思ったがやめた。

使い方の分からないモノは、使うべきじゃないよね

じゃ、七夜と僕の身体に頼るしかないね

「ヨケテバツカリジャツマラナイヨ……。モットコウゲキシテキ
テヨ」

「うん。わかったよ」

本人から要望があつたから、今度は僕の番だ

小太刀を投擲するけど、レーヴァティンによって更に碎かれる

急接近し、七夜を右斬り上げに振り上げてレーヴァティンを弾き上
げる

がら空きになった胴体、鳩尾に向けて蹴りを放つ

「カハッ……………！」

蹴りをモロに受け、5 m程吹き飛ぶ

いくら吸血鬼でも、急所には弱いみたいだね

5 m程先でうずくまっているフランドールめがけて駆け出し、レー
ヴァティンを弾き、蹴る。蹴る蹴る蹴る。更に蹴って壁に叩き

つける

叩きつけられたフランドールを、裏回し蹴りで、蹴る
フランドールは噓せながらも、立ち上がる

「モウ、ユルサナイ…………… ユルサナイ！！！」

突如叫び声を上げるフランドール

これは本格的に怒らせちゃったかな？

だってフランドールの周りを、炎が渦巻いてるし。

まって、レーヴァテインの姿が変化する

炎に包まれたレーヴァテインは棒の様な姿から、剣の姿に変わって
いく

不味い、果てしなくあれは不味い。僕の本能がそう叫んでいる

フランドールめがけて疾り、七夜を下段に振る。狙いは左手首

皮膚を破り、肉を裂き、骨を断つ

「アアアーーーーッ！！！」

叫びは、悲鳴へと変わる。

再び七夜を、振るう。今度は右肘から下を斬り飛ばす
距離をと取って、七夜に着いた血を舐めとってみる

…………… うん。やるんじゃないかった。カッコ付けたつもりだけど、
血なんて舐めるモノなんかじゃない

「アッ、アア…………… うう…………… 痛い、痛いよお姉さま…………… 助けてえ」

やばい。流石に大人げなさすぎた

「ゴメン！今すぐ治すから」

七夜を鞘に仕舞ってフランドールに近づく

「やめて…………こないで」

「大丈夫。もう、痛くないから」

手の断面を診る。すっぱり断たれている

僕は“傷を無かった事にする程度の能力”を発動して、傷を無かった事にする

「どう？まだ痛む？」

「うん…………じくじくする」

僕も僕自身に能力を掛ける

実はあの光の球を避していたんだけど、何発も避けきれずに掠っていたからだ

「？僕は何とも無いけど」

もしかして、この能力は傷の深さに反映してダメージが残るのかな？

「ねえ、フランドール」

呼び掛けると、ビクリとされた…………あっはっは。悲しいよ。やりすぎたよ

「何で君は、ここに閉じ込められてるの？」

「それは……わたしの力が強すぎるからって、495年間」

495年！？何ともそんなに、長くも閉じ込められるなんて僕が放心していると、鉄扉が開いた

「妹様、掃除にやってm……！？」

扉を開けて入ってきたのは、咲夜さんだ

「貴様、妹様に何を！！」

「ちょっと待って！こっちは戦った後で、それなりに疲れてるから！」

「さ、咲夜」

僕の場所から離れて、咲夜さんの下に走るフランドール
そして咲夜さんに抱きつき、すすり泣く

「痛かったよう、怖かったよう……」

「妹様、大丈夫ですよ」

うわ、こっち無茶苦茶睨まれてる

「説明とか、提案とかは後ですから今は」

「今は？」

「一時間ほど寝させて……」

□
□
□
□

妹様が『遊んでいる』音が暫くしなくなると、私は掃除道具を持って部屋に入った

「妹様、掃除にやってm……！？」

おかしい。普段ならそこら中に、体の欠片が散らばってるはずなのに今回はない。

よく見ると、客人こと『おもちゃ』藤原閃の所にいた

「貴様、妹様に何を！！」

「ちょっと待って！こっちは戦った後で、それなりに疲れてるから！」

「さ、咲夜」

私の下に駆け寄ってくる妹様を抱き抱える
そしてすすり泣く妹様

「痛かったよう、怖かったよう……」

「妹様、もう大丈夫ですよ」

妹様の頭を撫でながら、藤原閃を睨む

「説明とか、提案とか後でするから今は」

「今は？」

「一時間ほど寝させて……………」

そう言つて彼は本当に寝た

それにしても提案？一体何の提案かしら

さて、僕はレミリアの居る応接間の前にいる
僕は扉を開いて中に入る。

レミリアの隣には『ちゃんと』咲夜さんが居る

「……………？貴方、フランはどうしたの？」

「ああ。あの子なら遊び疲れて寝てますよ

永遠にですけどね」

「ッ！貴様アツ！！」

すかさずナイフを投擲しながら、僕に飛びついてくる咲夜さん
これを僕は居合いの一撃でナイフを全て弾き、返す力で咲夜さんの
胴体をかっ捌く

「お嬢……………さ、ま」

「咲夜!？」

僕の後ろで床に倒れ伏す咲夜さん
よし。ここまでは大丈夫だ

問題はここからだ

「貴様、フランだけならず咲夜までも

……………殺してやる。殺してやるぞ貴様アツツ!……………!」

叫ぶと同時にフランドール同様に、光球を大量に放ってくる
これを僕は避ける

……………くっ、流石にそう簡単にはいかないか

「ちょこまかと鬱陶しい!!」

神罰『幼きデーモンロード』!」

カードを取り出して、さっきとは違う攻撃を仕掛けてくる

ジグザグとレーザーを撃ってくる。

視覚で捉えられる

これなら蒼仁の撃つ銃弾の方がよっぽど速い

これなら、通り抜けられる！！

レーザーが発射されたら、走りながら速度を落とし、撃ち終わればまた加速する

「あぶなっ！」

レーザーだけじゃなく青い光球や赤い光球、さらには大型の黄色い光球まで放ってくる

スライディングで地面を滑りながら潜りこむ
後、5 mそこで攻撃が止んだ

「もういい！貴様は徹底的に殺す！」

出よ！神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」

光球の次は槍！？

レミリアは緋色の炎を纏った槍を振り降ろすが、七夜で防ぐ
そのままバチバチと音を立てる。……頼むから壊れないでね！

「貴様はよくもフランを、咲夜を！！」

「君はフランドールを閉じ込めていたんでしょ！？
じゃあ何故あの子の名前を呼ぶ！」

「黙れ人間！貴様に何がわかる？！」

「ぐあっ！」

僕が上段で防いでいる足下に蹴りを入れられる

「だから、何であの子の名前を呼ぶの？」

その声が聞こえたと同時に右手と左足に鋭い痛みを感じる
多分、跳ねられた

「ぐあ……………があ……………」

「ふう……………これでやっと話が聞けそうだね。
何であの子を閉じ込めたの？」

「私は……………」

私は何で

「恐かった……………あの子の能力が……………」

何でコイツに

「最初は、落ち着くまで閉じ込めておくつもりだった」

話してるんだろう？

「その内にあの子に狂気が芽生えて、だからあのままずっと……………」

抱き締めたかったなあ……………地位も、プライドも何にも要らずに
……………」

「そう。

じゃ、僕がそれを叶えてあげるよ」

「…………え？」

僕はレミリアの話聞き終えた
そして、僕が取った行動は

「そう。」

じゃ、僕がそれを叶えてあげるよ」

「…………え？」

僕は能力を発動させ傷を無かったことにする
千切れ飛んでいた右腕と左足が元通り、無かった事になる

「入っておいで。フランドール」

そう。入ってきたのは永遠に寝ている『筈』のフランドールだ

「お姉様…………」

「ふ、フラン？」

「お姉様あー！」

涙を浮かべながらレミリアへと抱きつくフランドール

「さて、僕達は出ましようか？咲夜さん」

「……そうですね」

死んでいる筈の咲夜さんが起き上がる

「あのう……咲夜さん。服が凄い事になっていきますよ？」

「え？」

そう呟き自分の体を見回す咲夜さん
うん。胸とか結構着痩せするt

□
□
□
□

「あのう……咲夜さん。服が凄い事になっていきますよ？」

「え？」

自分の体を見回してみる

……っ！！これは！！！！

ちらりと藤原閃の顔を見る

こちらを、特に胸を見ている

気付くと私は回し蹴りを放ち、藤原閃の意識を刈り取っていた

私とした事が……服を早く替えないと

S t a g e 3 : 狂気・吸血鬼・姉妹（後書き）

50口径云々はフラグだったりする回（え？

戦闘描写は頑張って書いたけど

・・・。。自分でもイミフ

W i i で書いているんだ許してくれ・・・

そして・・・更新遅れてマジでごめんなさい！！！！

主な理由はテストです

実はこの3日後にもテストがあつたりします

12/9にMYP Cが手に入ります！！

やったー！！！！これで更新速度が上がる・・・箒

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7014n/>

東方銃剣録

2011年10月7日02時50分発行